

看護学生による「教職員が育成する人材像に向けて大切にしている関わり」に対する評価

小田美紀子・吾郷美奈恵・藤田小矢香・長島 玲子・
井上 千晶・岡安 誠子・伊藤 奈美

概 要

「教職員が育成する人材像に向けて大切にしている関わり」に対する学生による評価の現状を明らかにし、学生に対する教職員の関わりのあるあり方を検討した。学生による評価が高かったのは、「必要な知識・技術・態度が修得できる環境整備」や「必要な知識・技術・態度が修得できる関わり」、「目標達成に向けた行動の尊重」であり、評価が低かったのは、「人間関係の模範を示している」であった。実習等において教職員と関わる時間や密度の濃さが影響していると考えられた。引き続き、学生と関わる時間の確保や質を高めること、教職員自身が人間性を高め、日頃から学生や教職員同士の接し方を考え人間関係の模範が示せるようにすることが必要である。

キーワード：看護学生、教職員、評価
FD（ファカルティ・ディベロップメント）

I . 緒 言

現在、日本の大学は急速な社会の変化に対応してその役割を果たすため、各大学において改革が進められている。文部科学省や中央教育審議会において、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーの策定及び運用に関するガイドラインが提起された。各大学において、個々の建学の精神や強み・特色等を踏まえ、三つのポリシーが適切に策定され、それらに沿って充実した大学教育が自主的・自律的に展開されることが期待されている（文部科学省, 2016）。また、全国の大学において、授業内容や方法を改善し向上させるための組織的な取り組みとして、ファカルティ・ディベロップメント（以下FD）活動が積極的に実施されている（文部科学省, 2006）。

我々は、2013年度にA大学のFD研修会において、各教職員がA大学の育成する人材像「自

ら考え行動できる、視野の広い専門職業人」に向けて大切にしていることを記載したカードを持ち寄り、ワークショップを行った。

研修会后、カードに記載された文章を元にFD委員がラベルワークを行い、A大学が育成する人材像に向けて教職員が大切にしていることをまとめた。その結果、教職員は学生一人ひとりが「①目指す看護者像が描ける」ように、学生に動機づけを図る姿勢として「②主体性を尊重する」、「③力や可能性を信じる」、「④探求心や向上心を刺激する」、学生が学び続ける関わり方として「⑤生活から学べるように関わる」、「⑥人間関係を円滑に進めるように関わる」、「⑦知識・技術を修得できるように関わる」、「⑧学ぶ楽しさを実感できるように関わる」を大切にしていた（図1）。その後、教職員の関わりについて学生からの評価を得るために、上記8項目を元に教職員が大切にしている関わりについて、独自に15項目の質問紙調査票を作成した。

本研究において、作成した調査票により、「教

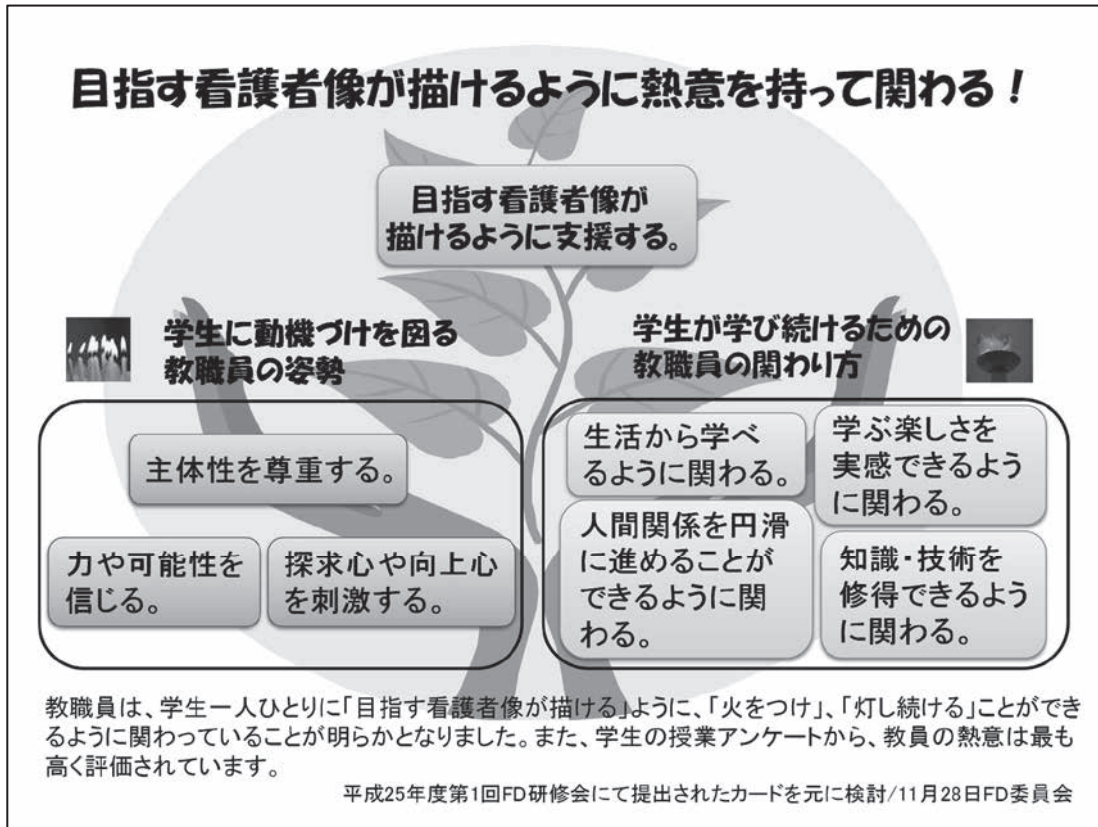


図1 教職員が育成する人材像に向けて大切にしていること

職員が A 大学の育成する人材像に向けて大切にしている関わり」を学生がどのように受けとめているか現状を明らかにし、学生に対する関わりのあり方について検討した。

Ⅱ. 研究方法

1. 対象者

2013 年度から 2015 年度の期間に A 大学に在籍する看護学生全員、延べ 940 名を対象とした。

なお、A 大学は、2012 年度に 4 年制大学看護学部を開設し、前身である短期大学は 2014 年度に閉校している。それに伴い、短期大学専攻科の 1 年課程で行っていた保健師基礎教育は、4 年制大学において 3 年次からの選択制となった。また、短期大学専攻科の 1 年課程で行っていた助産師基礎教育は、4 年制大学の別科において 1 年課程の教育となった。

2. 調査方法

2013 年度から 2015 年度の 3 年間の各年度末

に無記名自記式質問紙による調査を行った。

3. 調査内容

調査内容は、基本属性として、所属、学年、保健師教育選択の有無と独自で作成した教職員が大切にしている関わり 15 項目で、「そう思わない」1 点、「あまりそう思わない」2 点、「どちらでもない」3 点、「ややそう思う」4 点、「そう思う」5 点の 5 段階評価とした。質問 15 項目は、図 2、表 2・3・4 に示している。

教職員の関わりに対し、「そう思う」「ややそう思う」を合計した割合を支援割合とし、割合が高いほど、教職員の関わりへの評価が高いことを示す。

4. 分析方法

2015 年度在籍者の教育課程・学年別及び 3・4 年次生の保健師教育選択の有無別に、各質問項目との関連を pearson の χ^2 検定にて分析を行った。また、4 年課程の学生の支援割合について、年次推移を示した。

統計処理には統計解析ソフト SPSSversion24 for Windows (IBM 社製) を使用し、統計学的有意水準は 5 % 未満とした。

Ⅲ. 倫理的配慮

調査は無記名で行い、対象者に研究目的や意義、研究方法とともに、研究協力の有無により利益・不利益は生じないこと、データは統計的に処理し、個人が特定されないこと、研究成果を関連学会・論文等で公表すること、データの取り扱いへの配慮について、文書と口頭で説明し、自由意思による協力を求めた。研究協力は、回収箱への調査票の自主提出をもって同意を得たとした。

なお本研究は、島根県立大学出雲キャンパス研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号 123)。

Ⅳ. 結 果

調査用紙を延べ 940 名に配布し、797 名から回答があった(回答率 84.8%)。各年度の養成課程・学年別の回答者数(回答率)を表 1 に示した。最も回答率が高かったのは、助産師養成課程で、3 年間とおして 100%、最も回答率が低かったのは、2015 年度の看護師 4 年課程 1 年次生 48.8%であった。

1. 養成課程別及び看護師 4 年課程学年別支援割合

2015 年度在籍学生の養成課程及び看護師 4 年課程学年別の支援割合の比較を表 2 に示した。

助産師 1 年課程は、看護師 4 年課程に比較し、「生活体験や経験と関連づけて考え」($p<.01$)、「人間関係の模範を示している」「わかる・発見することの楽しさ」($p<.05$)が有意に高かった。

看護師 4 年課程で他学年に比較し有意に高かった項目は、1 年生の「地域の人々との交流をとおした生活から学べる機会」($p<.05$)、3 年生の「目標達成に向けた行動の尊重」($p<.01$)、「必要な知識・技術・態度が修得できる関わり」「目標達成に向けた意思の尊重」「学習に興味・関心を持たせる関わり」「力を信じた関わり」「わかる・発見することの楽しさ」($p<.05$)であった。

看護師 4 年課程で他学年に比較し有意に低かった項目は、2 年生の「目標達成に向けた行動の尊重」($p<.01$)、4 年生の「地域の人々との交流をとおして生活から学べる機会」($p<.01$)、「必要な知識・技術・態度が修得できる環境整備」($p<.05$)であった。

2. 3・4 年次生の保健師教育選択の有無別の支援割合

2015 年度在籍学生 3・4 年次生の保健師教育選択の有無別の支援割合を図 2 に示した。

A 大学の看護師 4 年課程の保健師教育選択は 3 年次からである。保健師教育選択有りの回答 64 名、選択無し of 回答 75 名、未記入 7 名であった。

保健師教育を選択している学生は、選択していない学生に比較し、15 項目中の 10 項目で有意に高い評価をしていた。保健師教育を選択している学生の方が有意に高い項目は、「必要な知識・技術・態度が修得できる関わり」「目標達成に向けた行動の尊重」「目標達成に向けた意

表 1 養成課程・学年別の回答者

養成課程・学年		人(回答率)		
		2013年度	2014年度	2015年度
4年課程(看護師)	1年	75 (89.3)	80 (94.1)	42 (48.8)
	2年	75 (89.3)	72 (86.7)	68 (82.9)
	3年		79 (94.0)	69 (86.3)
	4年			77 (91.7)
3年課程	看護師養成3年	53 (68.8)		
1年課程	保健師養成	27 (90.0)	29 (96.7)	
	助産師養成	17 (100.0)	16 (100.0)	18 (100.0)

表2 養成課程別及び看護師4年課程学年別支援割合の比較(2015年度在籍学生)

質問項目	%					
	全体 (学部と助産師養成)	1年	2年	3年	4年	助産師養成
必要な知識・技術・態度が修得できる環境整備	①83.9	②81.0	①89.7	③87.0	*③75.3	①94.4
必要な知識・技術・態度が修得できる関わり	②82.8	④76.2	②83.8	*①91.3	②76.6	②88.9
目標達成に向けた行動の尊重	③79.2	②81.0	**①64.7	**②89.9	①79.2	②88.9
目標達成に向けた意思の尊重	④77.7	③78.0	⑨69.1	*③87.0	③75.3	③83.3
学習に興味・関心を持たせる関わり	⑤76.3	⑥66.7	⑥75.0	*④85.5	④71.4	②88.9
目指す看護師像が描けるような支援	⑥75.5	⑤73.8	③82.4	⑨71.0	④71.4	②88.9
力を信じた関わり	⑦74.8	⑥66.7	⑧70.6	*⑤84.1	④71.4	②88.9
チームで協力できる関わり	⑧74.5	②81.0	⑤77.9	⑧72.5	⑥66.2	②88.9
わかる・発見することの楽しさ	⑧74.5	⑥66.7	⑦72.1	*⑥82.6	⑤68.8	*①94.4
探求心や向上心への刺激	⑨71.9	⑦64.3	⑧70.6	⑦76.8	⑤68.8	②88.9
地域の人々との交流をとおした生活から学べる機会	⑩71.2	*①83.3	④79.4	⑨71.0	**⑨54.5	③83.3
教職員の学習活動	⑪70.4	⑥66.7	⑦72.1	⑧72.5	⑦64.9	②88.9
生活体験や経験と関連づけた考え	⑫65.5	⑧63.4	⑩66.2	⑪60.9	⑧63.6	**①94.4
可能性への期待	⑬63.0	⑩50.0	⑫58.8	⑩68.1	⑦64.9	④82.4
人間関係の模範を示している	⑭57.3	⑨57.1	⑬50.0	⑪60.9	⑨54.5	*③83.3
平均	73.2	70.4	72.2	77.4	68.5	88.4

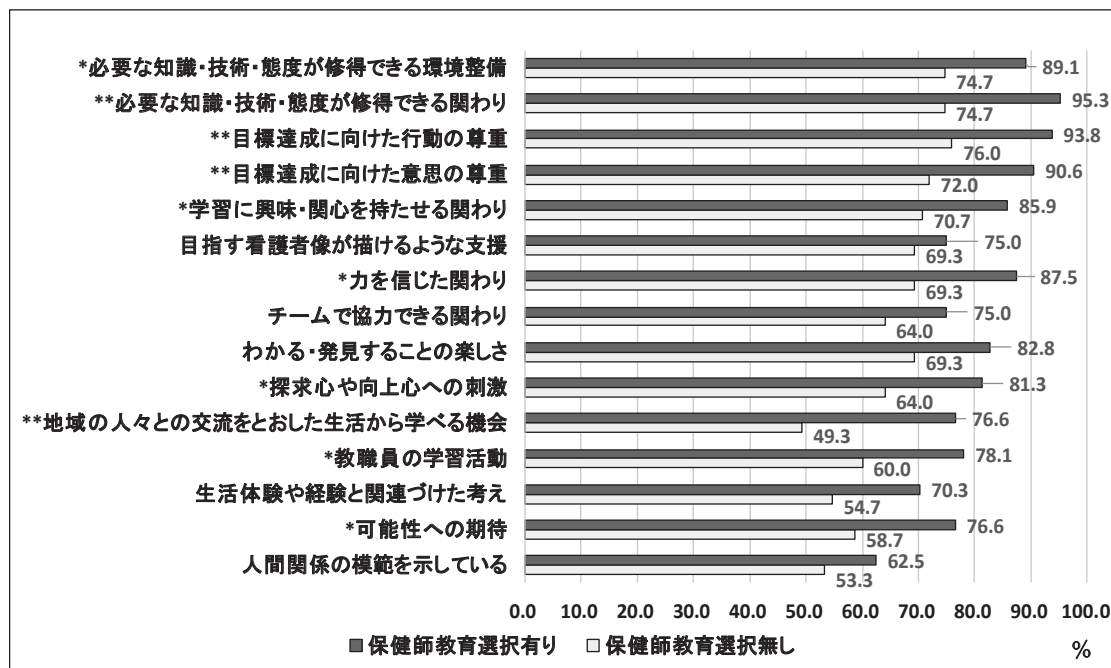
注1) ①~⑭は支援割合が高い順位を示した

注2) 助産師養成は学部全体と比較し、4年課程は他学年と比較した

注3) ■ 有意に高い項目を示した

注4) □ 有意に低い項目を示した

*p<.05 **p<.01



*p<.05 **p<.01

図2 保健師教育選択の有無別支援割合の比較(2015年度在籍学生)

思の尊重」「地域の人々との交流をととした生活から学べる機会」(p<.01),「必要な知識・技術・態度が修得できる環境整備」「学習に興味・関心を持たせる関わり」「力を信じた関わり」「探求心や向上心への刺激」「教職員の学習活動」「可能性への期待」(p<.05)であった。

3. 4年課程における入学年度別支援割合の年次推移

2012年度から2014年度入学生について、全項目の支援割合の平均を算出し、年次推移を図3に示した。2012年度入学生の支援割合は、2年時67.8%、3年時81.8%、4年時68.5%であった。2013年度入学生の支援割合は、1年時45.5%、2年時51.8%、3年時77.4%であった。2014年度入学生は、1年時80.2%、2年時72.2%であった。

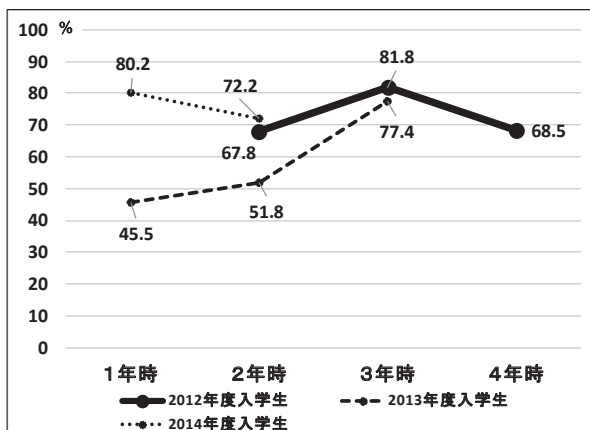


図3 入学年度別支援割合の年次推移

3年間のデータがあり、かつ同じような傾向を示している2012年度、2013年度入学生の各質問項目の支援割合の年次推移をそれぞれ、表3、表4に示した。

2012年度入学生において、支援割合が最も高かったのは、2年時「必要な知識・技術が修得できる環境整備」84.0%、3年時「必要な知識・技術が修得できる環境整備」92.4%、4年時「目標達成に向けた行動の尊重」79.2%であった。また、最も支援割合が低かったのは、3年間をとおして「人間関係の模範を示している」で2年時46.7%、3年時64.6%、4年時54.5%であった。

2013年度入学生において、支援割合が最も高かったのは、3年間をとおして「必要な知識・技術が修得できる関わり」で1年時68.0%、2年時64.4%、3年時91.3%であった。また、最も支援割合が低かったのは、1年時「可能性への期待」21.3%、2年時「人間関係の模範を示している」32.9%、3年時「人間関係の模範を示している」「生活体体験や経験と関連づけた考え」60.9%であった。

また、2012年度・2013年度入学生ともに支援割合は全ての項目において、2年時より3年時で高くなっていた。

V. 考 察

看護学生による「教職員が大切にしている関わり」に対する評価について、評価が高い項目と低い項目に分けて考察した。

1. 教職員の関わりに対する評価が高い項目について

2015年度全体で教職員の関わりに対し、「そう思う」「ややそう思う」を合計した割合である支援割合の上位3位にあがっていたのは、「必要な知識・技術・態度が修得できる環境整備」や「必要な知識・技術・態度が修得できる関わり」、 「目標達成に向けた行動の尊重」であった。また、必要な知識・技術・態度が修得できる環境整備や関わりは、2012年度、2013年度入学生ともに3年間をとおして上位3位までにあがっており、学生から最も高く評価されていた。これらは、看護職という目標が定まった専門職の養成に対し、教職員が最も力を入れている関わりであると考えられる。その熱意ある関わりが学生に受けとめられ、高く評価されていたと考える。

目標達成に向けた行動や意思の尊重の評価が4年次生で高くなるのは、就職や進学等の目標に向けた学生の行動への支援が増えるためではないかと考えられる。

養成課程や保健師選択の有無による特徴として、助産師1年課程と看護師4年課程の保健師教育選択者の評価が高かった。これは、教職員との関わりの多さや強さが影響していると考えられる。卒業要件の最低取得単位数を比較して

表3 支援割合の年次推移 (2012 年度入学生)

質問項目	%		
	2年時 (2013年度)	3年時 (2014年度)	4年時 (2015年度)
必要な知識・技術・態度が修得できる環境整備	①84.0	①92.4	③75.3
必要な知識・技術・態度が修得できる関わり	②82.7	②91.1	②76.6
目標達成に向けた行動の尊重	⑧66.7	⑤84.8	①79.2
目標達成に向けた意思の尊重	⑧66.7	③88.6	③75.3
学習に興味・関心を持たせる関わり	⑥70.7	④86.1	④71.4
目指す看護者像が描けるような支援	④73.3	⑤84.8	④71.4
力を信じた関わり	⑩61.3	⑥83.5	④71.4
チームで協力できる関わり	⑦69.3	⑧78.5	⑥66.2
わかる・発見することの楽しさ	⑤72.0	⑥83.5	⑤68.8
探求心や向上心への刺激	⑦69.3	⑦81.0	⑤68.8
地域の人々との交流をとおした生活から学べる機会	③76.0	⑨77.2	⑨54.5
教職員の学習活動	⑨64.0	⑧78.5	⑦64.9
生活体験や経験と関連づけた考え	⑩61.3	⑩75.9	⑧63.6
可能性への期待	⑪53.3	⑩75.9	⑦64.9
人間関係の模範を示している	⑫46.7	⑪64.6	⑨54.5
平均	67.8	81.8	68.5

注1) ①～⑫は支援割合が高い順位を示した

注2) 支援割合が最も高い項目を示した

注3) 支援割合が最も低い項目を示した

も助産師は1年で34単位、看護師4年課程の保健師教育選択者は136単位であり、看護師4年課程で保健師教育選択無し124単位よりも多く、それだけ教職員と関わる時間が多く、関わりの密度も濃いと考えられる。小川は、日本の高等教育やIRコンソーシアム研究の課題として「日本の高等教育では、学生の気質も変容している中で、新しい教授法に基づいた教育を提供するだけでなく、密度の濃い教員との関わりも教育の質向上に切り離せない要因であることが明らかとなった。このような仕組みを意識的に作り出すことが各大学に求められていると分析できる。」と述べている(小川, 2013)。IR (Institutional Research) とは、「教育、経営、財務情報を含む大学内部の様々なデータの入手や分析と管理、戦略計画の策定、大学の教育プログラムのレビューと点検など包括的な内容を本来は意味する」(大学IRコンソーシアム,

2017)。本研究の結果からも教育の質保証には、学生と関わる時間の確保や密度の濃い関わりが必要であることが考えられた。

看護師4年課程における学年の特徴をみると実習が影響していると考えられた。

1年次生で「地域の人々との交流をとおした生活から学べる機会」が他の学年に比較し有意に高い評価となったのは、1年次に行う家庭訪問実習の影響が考えられる。この実習は、A大学の教育の特徴の一つである大学周辺地域の家庭訪問実習で、1年次の10月から3月まで同じ家庭に4回継続訪問を行い、地域の人々から学ぶ機会を設けている。実習において生活者を理解するために学生が実施したことをみると、「生活習慣」、「価値観・生き方・生活の楽しさ」、「仕事・生計・医療費・経済状況など」、「人的環境」に関するものが5段階評価の4以上であった(吾郷, 2009)。病院における看護であっても、

表4 支援割合の年次推移 (2013年度入学生)

質問項目	%		
	1年時 (2013年度)	2年時 (2014年度)	3年時 (2015年度)
必要な知識・技術・態度が修得できる環境整備	②66.7	③61.6	③87.0
必要な知識・技術・態度が修得できる関わり	①68.0	①64.4	①91.3
目標達成に向けた行動の尊重	⑨42.7	④58.9	②89.9
目標達成に向けた意思の尊重	⑥45.3	⑨49.3	③87.0
学習に興味・関心を持たせる関わり	⑥45.3	⑥56.2	④85.5
目指す看護者像が描けるような支援	⑦44.0	⑥56.2	⑨71.0
力を信じた関わり	⑪38.7	⑦53.4	⑤84.1
チームで協力できる関わり	⑧43.2	⑤57.5	⑧72.5
わかる・発見することの楽しさ	④50.7	⑨49.3	⑥82.6
探求心や向上心への刺激	⑤46.7	⑧52.1	⑦76.8
地域の人々との交流をとおした生活から学べる機会	③65.3	②62.5	⑨71.0
教職員の学習活動	⑩41.3	⑪41.1	⑧72.5
生活体験や経験と関連づけた考え	⑬29.3	⑩41.7	⑪60.9
可能性への期待	⑭21.3	⑪41.1	⑩68.1
人間関係の模範を示している	⑫34.7	⑫32.9	⑪60.9
平均	45.5	51.8	77.4

注1) ①～⑭は支援割合が高い順位を示した

注2) ■支援割合が最も高い項目を示した

注3) □支援割合が最も低い項目を示した

支援の対象を「病気をもつ人」という理解ではなく「生活者」と捉えることができるよう教員も意識して学生に関わっているため、学生も実習において実際に生活者を意識した関わりを行うことができ、教職員の関わりに対する評価も高くなったと考える。

2012年度、2013年度入学生ともに3年時の評価が最も高くなっている。また、全ての項目において2年時より3年時の方が高い評価となっている。さらに、2015年度在籍学生をみると、3年次生において、6項目が他の学年と比較し有意に高い評価となっている。A大学では3年次に臨地実習が本格的に始まる。そのため、教職員は学生への関わりの基本として学生の力を信じ、学生個人の目標達成に向けた支援や実習に向けて知識・技術を高める関わり、積極的に学びを深めることができるように望ましい実習態度や学習に興味関心を持たせる関わりが強く

なる。さらに、わかる・発見することの楽しさを実感できるような指導方法等を工夫する。これらの意図した関わりが学生に受けとめられ、3年次生の評価が高くなったと考えられる。また、授業時間が4学年で3年次が最も多く、講義や実習、演習により教職員と個別に関わる時間や密度が濃くなることが高い評価につながったと考えられる。

2. 教職員の関わりに対する評価が低い項目について

2015年度全体で支援割合が最も低かったのは、「人間関係の模範を示している」であった。2012年度入学生は、3年間をとおして、2013年度入学生については、3年間で2年間において最も低い評価となっており、支援割合が3割の年もあった。教職員は、人間関係の模範を示す関わりを大事に思っているが、十分に示すこと

が出来ていないという結果であった。学生は、日頃の教職員の学生への接し方や教職員同士の関係を観察して評価していると考えられる。

人間関係の模範を示すことが出来るか否かは、教職員の人間性が影響していると考えられる。Evans が看護学生を対象に行った望ましい教師と望ましくない教師に関する調査の結果、「学生は、講義の主題よりむしろ教師の人間性を重視し、特に教師の親切さや学生に対しての熱心さ、ユーモアといった要素を重視する傾向にあった。」と述べられている (Evans, 2004)。人間関係の模範を示すことが出来るためには、教職員自身が人間性を高めることができるよう自助努力し、日頃から学生や教職員同士の接し方を考え人間関係づくりを行っていくことが重要であると考えられる。

2015 年度在籍学生の看護師 4 年課程で他学年に比較し 2 年次生の「目標達成に向けた行動の尊重」の評価が有意に低かった。これは、2 年次は授業の総時間数が 1 年次より減り、教職員と関わる時間が少なくなることが要因の一つと考えられる。

4 年次生の「地域の人々との交流をとoshita 生活から学べる機会」が他学年に比較し評価が有意に低かったのは、4 年次の春学期に在宅看護の実習があるが、それ以降は保健師教育を選択していない学生は、地域に出かけて学ぶ機会がなくなる。A 大学は 1～3 年次まで地域で学ぶ実習に力を入れているため他学年に比較し 4 年次生の評価が低くなったと考えられる。

他学年に比較し評価が有意に低かった 4 年次生の「必要な知識・技術・態度が修得できる環境整備」と 2012 年度入学生、2013 年度入学生ともに 3 年時より 4 年時で全体の評価が低くなっていたのは、4 年次の授業時間が 4 学年で最も少なく、教職員と関わる時間が減少することや 4 年次生になると学生が専門職として成長し教職員に求めるものが高くなることが考えられる。

VI. 今後の課題

学生の目指す看護者像の醸成は学習意欲にも

影響することが考えられ、入学時から将来を見据え目指す看護者像を描けるような教育的関わりを行うことが課題と考える。また、教員の関わりに対する学生の受けとめは、カリキュラム編成による影響も大きいと推察された。

学生の目指す看護者像の醸成のため、教職員間で課題を共有して意識化し、連携した取り組みを行っていくことが必要と考える。

VII. 結 論

「教職員が A 大学の育成する人材像に向けて大切にしている関わり」を学生がどのように受けとめているかの現状として以下が明らかとなった。

1. 全体をとおして評価が高かったのは、「必要な知識・技術・態度が修得できる環境整備」や「必要な知識・技術・態度が修得できる関わり」、「目標達成に向けた行動の尊重」であった。
2. 全体をとおして評価が低かったのは、「人間関係の模範を示している」であった。
3. 養成課程及び看護師 4 年課程学年別・保健師教育選択の有無別の特徴は、講義・演習や実習において教職員と関わる時間や密度の濃さが学生への受けとめに影響していると考えられた。

今後に向けては、入学時から将来を見据えたカリキュラム編成を引き続き検討し、学生の目指す看護者像が醸成できるよう教育的な関わりを共有し連携した取り組みを行っていくことが必要である。

学生に対する関わりの具体的なあり方は以下のとおりである。

1. 育成する人材像に向けて、学生と関わる時間の確保や関わりの質を高めていくこと。
2. 人間関係の模範を示すことが出来るよう、教職員自身が人間性を高めるために自助努力を行うこと。また、日頃から学生や教職員同士の接し方を考え人間関係づくりを行っていくこと。

文 献

- 吾郷ゆかり・吉川洋子・松本亥智江他 (2009) :
看護基礎教育における「生活者を理解する視点」－家庭訪問実習と病院実習後の自己評価より, 島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要, 3, 77-83.
- 大学 IR コンソーシアム (2017) : 設立趣意書, 2017-12-12, <http://www.irnw.jp/prospectus.html>
- David Richard Evans (2004) : Student Evaluation of Teachers, 国立看護大学校研究紀要, 3 (1), 91-99.
- 小川勤 (2013) : インスティテューショナル・リサーチとアウトカム評価に関する研究－カレッジ・インパクト研究に基づく教学改善の新展開－, 山口大学大学教育紀要, 10, 1-12.
- 文部科学省 (2006) : 大学における FD・SD (教員職員資質開発) の制度化と質的保証に関する総合的研究 (一般の大学教員を対象とするアンケート結果の概要), 2017-12-11, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/003/gijiroku/07012402/001/001.htm
- 文部科学省 (2016) : 「卒業認定・学位授与の方針」(ディプロマポリシー), 「教育課程編成・実施の方針」(カリキュラムポリシー) の策定及び運用に関するガイドライン, 2017-12-11, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/1369248.htm

Evaluation for “The Relation that I Value for the Talented Person Image which a Teacher and the Staff Raise” by the Nursing Student

Mikiko ODA, Minae AGO, Sayaka FUJITA, Reiko NAGASHIMA,
Chiaki INOUE, Masako OKAYASU and Nami ITO

Key Words and Phrases : Nursing students, Teachers and Staff, Evaluation,
FD (Faculty Development)